

kaminorippo.org

付録5g：仕事と安息日 — 現実世界の課題への対処

このページは、第4の戒め「安息日」に関するシリーズの一部です。

1. 付録5a：安息日と教会に行く日、2つの異なるもの
2. 付録5b：現代において安息日を守る方法
3. 付録5c：日常生活における安息日の原則の適用
4. 付録5d：安息日の食事 — 実践的な指針
5. 付録5e：安息日の交通手段
6. 付録5f：安息日におけるテクノロジーと娯楽
7. 付録5g：仕事と安息日 — 現実世界の課題への対処（現在のページです）。

仕事が最大の課題となる理由

ほとんどの信者にとって、安息日を守る上で最大の障害となるのは、仕事に就いていることです。食事、交通手段、技術の利用は準備によって調整できますが、仕事上の義務は、その人の生計と自己認識の根幹に関わります。古代イスラエルでは、国全体が安息日に休んでいたため、これが問題になることはめったにありませんでした。事業所も裁判所も市場も、当然のこととして閉まっていました。共同体全体で安息日を破ることはまれで、しばしば国全体が不従順に陥った時期や捕囚の時期と結びついていました（ネヘミヤ記13章15–22節参照）。しかし今日、私たちの多くは第7日が通常の労働日である社会に暮らしているため、この戒めが、あらゆる戒めの中で最も実践の難しいものとなっています。

原則から実践へ

このシリーズを通して、安息日の戒めは単独で存在する規則ではなく、神の聖なる永遠の律法の一部であることを強調してきました。ここでも、準備、聖性、必要性という同じ原則が当てはまりますが、それによって左右されるものは、さらに重大です。安息日を守るという選択は、収入、職業上の進路、事業のあり方に影響するかもしれません。それでも聖書は一貫して、安息日を守ることを、神への忠誠と神の備えへの信頼を試すもの、すなわち**自分の究極の忠誠がどこにあるのかを示す毎週の機会**として示しています。

よくある4つの仕事の状況

この記事では、安息日との衝突が生じる主な4つの分野を考えます。

1. **通常の雇用** — 小売業、製造業、または同様の仕事で、他の人に雇われて働く場合です。
2. **自営業** — 自分の店や在宅事業を営む場合です。
3. **緊急対応・医療従事者** — 警察官、消防士、医師、看護師、介護者、および同様の職務に就く人々です。
4. **軍務** — 徴兵による場合と職業軍人の場合の両方です。

どの状況でも、識別力、準備、勇気が求められますが、聖書の土台は同じです。「6日の間、あなたは働き、自分の仕事をすべてしなければならない。しかし、第7日はあなたの神、主の安息日である」（出エジプト記20章9–10節）。

通常の雇用

小売業、製造業、サービス業、または同様の仕事に雇われている信者にとって、最大の課題は、**通常、勤務日程を決めるのは他の人だということ**です。古代イスラエルでは国全体が安息日を守っていたため、この問題はほとんど存在しませんでしたが、現代の経済では、土曜日が最も忙しい労働日になることもよくあります。安息日を守る人の第一歩は、**早い段階で自分の信念を伝えること**であり、安息日を軸として1週間の勤務を調整するために、できる限りのことをすることです。

新しい仕事を探しているなら、履歴書ではなく、面接の段階で安息日を守っていることを伝えてください。そうすれば、自分の決意を説明する機会もないうちに選考から外される

のを防ぐことができ、他の日には柔軟に勤務できることを強調する機会も得られます。**多くの雇用主は、土曜日を休みにする代わりに、日曜日や希望者の少ない時間帯に働いてくれる従業員を高く評価します。**すでに雇われているなら、安息日の時間帯の勤務を免除してもらえるよう敬意をもって願い出て、勤務日程の調整、休日の勤務、あるいは他の日に不足する勤務時間を補うことを申し出てください。

雇用主には、**誠実さと謙虚さ、そして確固とした姿勢**で臨んでください。安息日は好みの問題ではなく、戒めです。雇用主は、曖昧な要望やためらいがちな要望よりも、明確で敬意ある要望のほうに応じやすいものです。週の間に準備をするのは、あなたの責任であることを忘れないでください。進めている仕事を前倒しで終え、作業場を整理しておき、安息日にあなたが不在であるために、同僚に不必要な負担がかからないようにしてください。誠実さと信頼できる姿勢を示すことで、あなたの要望の説得力が増し、安息日を守ることが、よりよい働き手を生み出すのであって、その妨げになるのではないことを示せます。

雇用主が勤務日程の調整をどうしても拒むなら、祈りながら選択肢を検討してください。神の戒めに従うために、減給を受け入れたり、部署を変えたり、さらには職業そのものを変えたりした人々もいます。こうした決断は困難ですが、安息日は毎週の信仰の試みとして定められており、**神の備えは、神に従うことで失うものよりも大きいことを信頼するのです。**

自営業

在宅事業、個人での業務の請け負い、店舗経営など、自営業を営む人々にとって、安息日の試みは形こそ違いますが、同じように現実的なものです。勤務時間を決めるのは雇用主ではなく自分自身ですから、聖なる時間帯には、**意図的に営業を止め**なければなりません。古代イスラエルでは、安息日に物を売ろうとした商人たちは叱責されました（ネヘミヤ記13章15–22節）。この原則は今も当てはまります。顧客が週末にあなたのサービスを期待しているとしても、神はあなたに**第7日を聖別すること**を求めておられます。

事業を始めようと考えているなら、その事業が、あなたが安息日を守れるかどうかにどのような影響を与えるのか、慎重に考えてください。第7日に休業しやすい業種もあれば、週末の売上や納期に依存する業種もあります。**あなた自身と従業員が、安息日に仕事をせずに過ごせる事業を選んでください。**事業計画にも顧客への案内にも、最初から安息日の

休業を組み込んでください。早い段階で何を期待できるかを明確にすることで、顧客があなたの定めた境界を尊重するよう教えていくのです。

すでに安息日に営業しているなら、たとえ収入が減っても、聖なる日に休業するために必要な変更をしなければなりません。聖書は、安息日の労働から利益を得ることは、自分でその仕事をするのと同じほど従順を損なうと警告しています。共同経営は、この問題を複雑にすることがあります。信者ではない共同経営者が安息日に事業を運営するとしても、**あなたは依然としてその労働から利益を得ており**、神はこのような取り決めを受け入れることはありません。神を敬うために、安息日を守る人は、自分の収入が安息日の労働に依存するあらゆる仕組みから身を引かなければなりません。

こうした決断は大きな犠牲を伴うことがありますが、同時に力強い証しを生み出します。顧客や同僚は、あなたの誠実さと一貫性を目にするでしょう。安息日に事業を休むことで、あなたは、絶え間ない生産ではなく神の備えに究極の信頼を置いていることを、行動で宣言するのです。

緊急対応・医療従事者

緊急対応や医療関連の分野で働いていれば、それだけで安息日にも働くことが許されるという誤解が広く見られます。この考えは通常、**イエスが安息日に人々を癒やされた**という事実から生じています（マタイによる福音書12章9–13節、マルコによる福音書3章1–5節、ルカによる福音書13章10–17節参照）。しかし、よく見ると、イエスは安息日に**「治療所」を運営するつもりで**家を出られたのではないことが分かります。イエスの癒やしは、その場で行われた自発的な憐れみの行いであって、職業として予定を組んで繰り返す仕事ではありませんでした。**イエスが癒やしの報酬を受け取られた**ことは一度もありません。イエスの模範は、安息日であっても、本当に助けを必要としている人々を助けなければならないことを教えていますが、第4の戒めを取り消したり、医療や緊急対応の仕事を恒久的な例外にしたりするものではありません。

現代の世界では、こうした役割を喜んで引き受ける、安息日を守らない人員が不足することはめったにありません。病院、診療所、緊急対応機関は、主に安息日を守らない人々を職員として、1日24時間、週7日稼働しています。こうした人員の豊富さによって、**神の子が、安息日に定期的に働く必要があると知りながらその職に就くことを正当化する根拠はなくなります。**どれほど高尚に聞こえようとも、どのような職業も、たとえ人を助けることを中心とする職業であっても、第7日に休まなければならないという神の命令に優先

することはありません。**私たちは、次のように主張することはできません。**「神にとっては、人々に仕えることのほうが、神の律法を守ることよりも重要です。」神ご自身が、私たちのために聖性と休息を定めておられるからです。

これは、安息日を守る人が、安息日に命を救ったり苦しみを和らげたりするために行動することは決して許されない、という意味ではありません。イエスが教えられたように、「**安息日に善いことをするのは、律法にかなっている**」のです（マタイによる福音書12章12節）。事故、病気の隣人、自宅での危機など、予期しない緊急事態が起きたなら、命と健康を守るために行動すべきです。しかし、それは毎回の安息日に働く義務のある職業に就くこととは、まったく異なります。他に対応できる人がいないまれな場合には、差し迫った必要を満たすために、一時的に代わって対応することもあるかもしれません。しかし、そのような状況は例外でなければならず、常態となってはなりません。また、その時間帯の働きに対して料金を請求してはなりません。

指針となる原則は、その場で行われる自発的な憐れみの行いと、定期的な雇用による仕事を区別することです。憐れみは安息日の精神にかなっていますが、事前に予定された利益追求のための労働は、その精神を損ないます。医療や緊急対応の分野で働きながら安息日を守る人々は、可能な限り、安息日を尊重する勤務日程を交渉し、戒めに違反しない職務や勤務時間帯を探し、そのようにしながら神の備えを信頼すべきです。

軍務

軍務は、しばしば**政府の権限の下で義務づけられる任務**を伴うため、安息日を守る人々に特有の課題をもたらします。聖書には、この緊張に直面した神の民の例が記されています。例えば、イスラエルの軍隊はエリコの周りを7日間行進しました。これは、第7日に休まなかったことを意味します（ヨシュア記6章1–5節）。また、ネヘミヤは、安息日の聖性を確実に守るため、安息日に町の門に警備の者たちが配置されたことを記しています（ネヘミヤ記13章15–22節）。これらの例は、国防や危機の際には任務が安息日にまで及ぶ場合があることを示しています。しかし同時に、そのような状況は、個人の職業選択ではなく、共同体全体の存続に結びついた例外だったことも浮き彫りにしています。

徴兵された人々にとって、その状況は自ら志願して選んだものではありません。命令の下に置かれ、勤務日程を選べる余地は極めて限られています。その場合でも、安息日を守る人は、安息日を守ることが自分の深い信念であると説明し、可能な限り安息日の任務を免除してもらえるよう、上官に敬意をもって願い出るべきです。たとえ願いが認められなく

ても、その努力をするだけで神を敬うことになり、思いがけない好意を受けることにつながるかもしれません。何よりも、謙虚な態度と一貫した証しを保ってください。

職業軍人になることを考えている人々の場合、状況は異なります。職業としてその職務に就くことは、他のどの職業とも同じように、個人の選択です。定期的に安息日を破ることになると分かっていながらその職務を引き受けることは、安息日を聖別しなければならないという命令と両立しません。他の分野と同じく、指針となる原則は、安息日を守ることが尊重される配属先や職務を探すことです。ある分野では安息日を守ることができないのであれば、神が他の方面に道を開いてくださると信頼し、祈りながら別の職業に進む道を改めて検討してください。

徴兵による場合も志願による場合も、重要なのは、**どこにいても神を敬うこと**です。反抗することなく、可能な限り安息日を守らなければなりません。権威に敬意を示しながら、静かに自分の信念に従って生きてください。そうすることで、神の律法への忠誠は都合のよさを条件とするものではなく、忠実さに根ざしていることを示せます。

結論：生き方としての安息日

この記事をもって、安息日に関するシリーズを締めくくります。創造における土台から、食事、交通手段、技術の利用、仕事における具体的な実践に至るまで、第4の戒めは単独で存在する規則ではなく、神の永遠の律法に織り込まれた生きたリズムであることを見てきました。安息日を守ることは、特定の活動をしないことにとどまりません。それは、あらかじめ準備し、普段の労働をやめ、神のために時間を聖別することです。それは、**神の備えを信頼することを学び**、神が優先されることを中心に1週間の過ごし方を整え、休むことのない世界で神の休みを身をもって示すことです。

あなたの状況がどうであれ、誰かに雇われていても、自営業を営んでいても、家族の世話をしていても、複雑な環境で務めを果たしていても、安息日は変わらず、生産の循環から抜け出し、神の臨在の中にある自由へと入るための毎週の招きです。これらの原則を実践するにつれて、安息日は重荷ではなく喜びであり、忠誠のしるしであり、力の源であることが分かるでしょう。安息日は、週に1日だけでなく、毎日、生活のあらゆる領域で神を信頼するよう、あなたの心を訓練します。